

平成15年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 スワイガニ

学名 *Chionoecetes opilio*

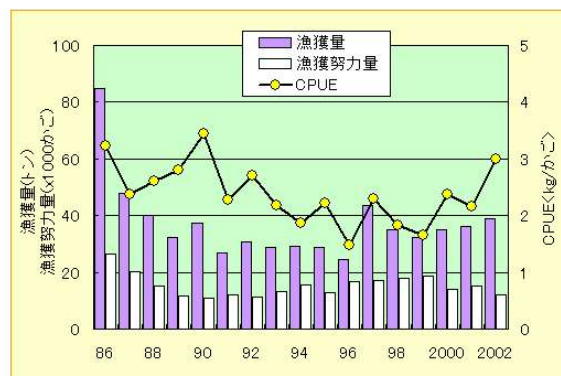
系群名 北海道西部系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特徴

寿命： 不明（京都府沖では、13～15年と推定されている）
成熟開始年齢： 不明
産卵期・産卵場： 不明であるが本海域内における再生産の可能性が高い
索餌期・索餌場： 不明、漁場は水深400m前後の海域
食性： 成体は主に甲殻類や二枚貝、クモヒトデ類で、この他に魚類、イカ類、ゴカイ類、巻き貝、ツノガイ類など
捕食者： 不明



漁業の特徴

北海道西部海域でのスワイガニの主要な漁獲は、かにかご漁業であげられている。かにかご漁業は、1990年の省令改正により、知事許可としてずわいがにかご漁業とべにずわいがにかご漁業に区分され、ずわいがにかご漁業の操業期間が11月1日～翌年4月30日とされた。現在、ずわいがにかご漁業の許可隻数は3隻である。操業はべにずわいがにかご漁業との併用で行われている。雄の甲幅10cm未満は採捕禁止（省令は9cm）等の許可条件がなされているほか、自主的な保護区が設定されている。

漁獲の動向

1986年以降の北海道西部海域におけるスワイガニの漁獲量は、1990年頃まで減少した後、30トン前後で横這い傾向にあり、2002年漁期の漁獲量はかご漁業によるものが37

トン、刺し網漁業による混獲が2トンであった。漁獲量は漁期年（7月～翌年6月）で集計した。

資源評価法

かにかご漁業の漁獲量とCPUEから資源の水準、動向を判断した。1997年に小樽を拠点とする船の一部が操業を止め、稚内を拠点とする船が操業を開始するなどして、ほぼ現在と同様の操業体制になった。この稚内船の操業開始によって、それまで南部に偏っていた漁場が北部にまで広がった。このため、資源の状況を検討するには、1997年以降の情報を中心に見る必要がある。

資源状態

漁獲量は、1986年漁期以降減少傾向を示していたが、1990年漁期以降は30トン前後で安定して推移し、2000年漁期以降は増加傾向を示している。かご漁業の努力量（かご数）は、近年減少傾向にある。CPUEは、1999年漁期以降増加傾向を示している。資源の水準については、資料が近年のものしかなく、漁獲量とCPUEの変動の幅も狭く、判断は難しいが、CPUEの動向から判断すると最低水準ではない。動向については、過去5年間のCPUEの傾向から増加と判断した。



管理方策

現状のかご漁業の努力量が、本海域でのズワイガニへ与える影響は大きくないと考えられる。また、許可隻数も少なく、今後も極端に漁獲努力が増加するとは考えにくい漁業形態であるので、資源の動向に合わせた漁獲を継続することで資源は維持できると考えられる。このため、2002年度の漁獲量 $C_{current} \times \gamma$ を $ABClimit$ とした。 γ は1998～2002年度の過去5年間に想定されるCPUEの直線的な増加傾向が今後2004年度まで継続すると仮定して、その想定上の2002年度と2004年度のCPUEの比から1.1と算定した。 $ABCTarget$ は、 $ABClimit \times \alpha$ とし、安全率 α は標準値の0.8とした。

	2004年ABC	管理基準	F 値	漁獲割合
A B C limit	43トン	$1.1C_{current}$	-	-
A B C target	35トン	$0.8ABClimit$	-	-

資源評価のまとめ

- かにかご漁業による漁獲状況から資源状態を評価
- 近年の漁獲努力量は減少、漁獲量、CPUEは増加傾向を示す

資源管理方策のまとめ

- 資源の動向に合わせた漁獲を継続することで資源は維持
- 許可条件・自主規制等の遵守による資源管理